

「A. N. ホワイトヘッドの形而上学研究：〈論理学と美学〉の観点から」

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程
有村直輝

1. 目次・章構成

序論

緒論 『思考の諸様態』の「理解」の章

第一部 1924-25年のホワイトヘッドの過渡期形而上学と〈論理学と美学〉の問題

第一章 ホワイトヘッドの過渡期形而上学と論理学

第二章 1924-25年のホワイトヘッドにおける形而上学と美学

第二部 1929年以降のホワイトヘッド形而上学と〈論理学と美学〉の問題

第一章 ホワイトヘッドの論理学観と美学の関係—1930年代の文献にもとづく考察—

第二章 予備的考察：思弁哲学と「有機体の哲学」

第三章 「有機体の哲学」における二種類の両立不可能性(*incompatibility*)

第四章 「パターン」をめぐる考察、論理学・形而上学・美学の関係についての再検討

第五章 ホメロスを聴くオデュッセウス—ホワイトヘッドの芸術論と美の創造

結論

2. 全体の要約

本論文の目的は、20世紀イギリスの哲学者アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド(1861-1947)の形而上学を〈論理学と美学〉という観点から明らかにすることである。ホワイトヘッドは、初期には数理論理学の記念碑的著作『プリンキピア・マテマティカ』(B. ラッセルとの共著)の仕事で知られながらも、1924年にハーヴァード大学の教授に就任して以降は「有機体の哲学」と呼ばれる独自の形而上学体系を構築した哲学者でもある。彼の形而上学体系はその難解さで有名であるが、本論文ではこの形而上学の難解さの一因はホワイトヘッドの哲学的方法論である「思弁哲学」にあることを指摘している。この思弁哲学とは、われわれがすでに持っている認識から出発し、そこからあらゆる存在や経験に適用可能な仮説を作り出すというものである。ホワイトヘッドの形而上学体系もまたこの思弁哲学の結果作り出された仮説としての面を持ち、この体系が難解であるとされてきたのは、この仮説が構築される際に出発点となったホワイトヘッドの認識や直観がそもそも何であったかが

明確ではないからである。この問題を確認したうえで本論文では、ホワイトヘッドの思弁哲学の実践の出発点となった認識は、『科学と近代世界』において彼が「信念」として語っているものに該当していることを指摘した。その信念とは、〈事物の体系には論理的調和と美的調和が含まれており、宇宙の進展はこの二つの調和によって条件づけられている〉という趣旨のものであった。〈ホワイトヘッドの形而上学の体系はこの信念に支えられており、彼の形而上学はその信念の理論的な展開であった〉、本論文はホワイトヘッドの形而上学の解明のためこのような仮説を提示し、本論文の議論全体を通してこの仮説の実証を試みるものであった。

この仮説を実証するにあたって必要となるのは、信念に含まれていた「論理的調和」と「美的調和」の解明である。だが実のところ「論理的調和」と「美的調和」という語の使用はホワイトヘッドの形而上学的な著作においてそれほど多くなく、それだけでは手がかりが不足している。しかし論理学や美学に由来する概念を拡張的に用いた記述や、「論理的」「美的」といった形容詞を付された諸概念などは彼の形而上学的な議論の随所に存在し、これらの諸概念は彼の形而上学体系を構成する重要なファクターとなっている。そこで本論文では、これらの「論理的」・「美的」な諸概念がホワイトヘッドの形而上学において持つ機能や位置づけについて考察することで、それらの概念との連関から「論理的調和」や「美的調和」の解明にアプローチすることを試みている。

またそれに伴い本論文では、学としての論理学と美学に対するこの時期のホワイトヘッドの見解についても考察を加えている。このような議論が必要とされるのは、ホワイトヘッドが形而上学的な議論において使用する「論理的」「美的」な諸概念そのものが、彼の論理学および美学の理解にもとづいており、その認識に「記述的一般化」を施したものだからであり、さらに、形而上学の構築と並行して論理学・美学そのものの捉え直しが彼の著作において試みられているからである。したがって、本論文では、上記の仮説の実証に向けて、1924年以降のホワイトヘッドの学としての論理学と美学に対する見解を明らかにするとともに、彼の形而上学に内在する「論理的」・「美的」諸概念の位置づけや機能を明らかにするという課題に取り組んだ。本論文の主題である〈論理学と美学〉という表記は、この学としての論理学と美学についての問題、そして形而上学体系を構成するファクターとしての「論理的」「美的」諸概念の問題という位相の異なる問題を合わせて表現したものである。

序論・緒論を除いて本論は二部構成であり、第一部においては1924-1925年の過渡期形而上学を、第二部においては1929年以降の体系化がなされた形而上学を対象とした考察を行い、彼が形而上学体系を構築していく過程で〈論理学と美学〉の問題がどのように関与していたかについて考察を行った。

第一部第一章では『科学と近代世界』、『アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの1924-1925年ハーヴァード講義』の読解を通して、自身の形而上学を構築しつつあったこの時期のホワイトヘッドが考える実在の基本的要素とその構造について考察しつつ、彼が論理学をその実在の持つ構造に基礎を持つ学として定義していることを示した。第二章では、形而

上学的議論に含まれる「美的ファクター」や「美的価値」といった概念の位置づけについて考察した。第一部の議論からは、〈論理学と美学〉の問題がいずれも彼の形而上学が記述しようとする実在の構造における「多の統合」と統合において生じる「包摂と排除」の問題に収斂していることが明らかになった。

第二部第一章では、1929年以降のホワイトヘッドの論理学観を「パターン」と「両立不可能性」の概念から明らかにし、さらに、彼がこの再定義された論理学が将来的に美学の基礎になるというヴィジョンを持っていたことを示した。次に第二章においてホワイトヘッドの形而上学体系の概要を確認したのち、第三章、第四章では、『過程と実在』や『観念の冒険』の読解を通して「パターン」や「両立不可能性」がホワイトヘッドの形而上学的な議論において果たしている機能や位置づけについて論じた。第五章ではホワイトヘッドの芸術概念について考察し、彼の形而上学に含まれる美学の理論を確認した。以上の議論を経て本論文の議論は、かつての「論理的調和」と「美的調和」の信念は、1929年以降の議論において、現実的存在の生成における「予定調和」とその論理的・美的形成条件の説へと結実していることを明らかにし、仮説を実証した。

3. 各章の要約

緒論 『思考の諸様態』の「理解」の章

本論文はやや特殊な構成となっており、全体的な問題設定を行う序論と、時期ごとのテキストの読解に入る本論第一部との間に、その二つの橋渡しをするものとして「緒論」を置いている。この緒論ではホワイトヘッドの晩年の著作『思考の諸様態』の「理解」の章についての注釈的な読解を行った。この章を取り上げる理由は、体系的な議論を離れ自由な思索を目的としたこの著作の議論がホワイトヘッドの方法論である思弁哲学の実践例を示すうえで適当だからであり、また特に「理解」の章の議論においては形而上学・論理学・美学の三つを繋ぐ概念が提示されているため、この概念をあらかじめ確認しておくことが第一部以降の議論を行ううえでも有用だからである。緒論ではまず、「理解」の章の議論は、(1)「理解の一般的性質についての考察」、(2)「(論理学・美学を含む)個別の学問における理解の様式や対象についての考察」、(3)「事物や宇宙の存在様式についての考察」(形而上学的考察)という三つの主題が循環しながら展開されていく構造を持ったものとして読解可能であるという見通しを立てた。そして、この見通しの下実際の議論の展開に沿って注釈を行いつつ、形而上学と論理学の関係や、論理学と美学の類比性についてのホワイトヘッドの主張を整理した。そしてこの「理解」の章においては、論理学者のヘンリー・シェーファーに由来する「非共立性 inconsistency (両立不可能性 incompatibility と同義)」の概念が、形而上学・論理学・美学を区別しつつ繋ぐキーワードとして使用されていることを指摘し、その重要性を強調した。最後に、この「非共立性 (両立不可能性)」を軸として形而上学・論理学・美学の話題を区別しつつ関連づけるような議論は、目立たない形ではあるものの『思考の諸様態』以前のホワイトヘッドの著作にも存在する

ことを指摘し、続く本論についての予告とした。

第一部第一章 ホワイトヘッドの過渡期形而上学と論理学

第一部冒頭でまず読解の対象とする 1924-25 年のハーヴァード講義録の基本的情報と、この時期のホワイトヘッドが「思弁哲学」を仮説形成の試みとして特徴づけていたことを簡単に確認したのち、第一部第一章では 1924-25 年時点でのホワイトヘッドの過渡期形而上学と論理学との関係について考察した。まず、講義録の読解によって、この時期のホワイトヘッドが目指していたのは、近代科学が前提とする「自然の秩序」のさらに根底にある「より広い秩序」を記述しうる形而上学の構築であったこと、そしてこの秩序は、生成・創発するものと永遠的・イデア的なものとがともにそこにおいて基礎を持つような秩序として考えられていたことを明らかにした。次に、このような形而上学との関係において論理学が、多としての永遠的なものとの関係から一としての現実態が創発してくる場面においてありうる「包摂と排除」の一般的関係を扱う学として定義されていく過程を、「差し込む真理の影」、formulation、「いかに（仕方）the how」などの概念の解釈を通して明らかにした。この章の議論から、ホワイトヘッドにとって論理学が、彼の形而上学において両立させようとする二つのタイプの存在（永遠的なものと創発的なもの）の結節点を扱う学であることを示し、彼の形而上学における論理学の問題の重要性を明らかにした。

第一部第二章 1924-25 年のホワイトヘッドにおける形而上学と美学

第一部第二章では、前章に引き続き 1924-1925 年のテキストを読解し、ホワイトヘッドの過渡期形而上学と美学の問題を論じた。論理学の場合と違い、この時期のテキストには学としての美学を定義しようとする明確な記述は見られない。しかし、テキストには「美的ファクター」や「美的価値」といった概念が存在しているため、こうした概念に着目した読解を行うことで、ホワイトヘッドの過渡期形而上学に内包される「美的なもの」の位置づけの考察を試みた。第二章ではまず、講義録および『科学と近代世界』の記述をもとに、この時期のホワイトヘッドの形而上学の課題を、個々の実在の「実現の組成（構造）」を理論化し、なおかつこの組成のうちに「美的価値」を織り込むという二重の試みとして特徴づけた。次いで、ホワイトヘッドがフランシス・ベーコン、アリストテレス、S・アレキザンダーなどから得た諸概念を読み替えつつ、この課題に取り組んでいく過程を講義録の読解から明らかにした。そして考察の結果、この時期のホワイトヘッドが、諸形相の選択・排除を経て新たな現実態が創発するという創発的な存在論を構想していたこと、そして、この存在の創発がすなわちその存在の美的価値の実現であるとするような特殊な意味での美学をこの存在論に組み込んでいたことを明らかにした。

第二部第一章 ホワイトヘッドの論理学観と美学の関係—1930 年代の文献にもとづく考察—

第二部第一章では 1929 年以降のホワイトヘッドの形而上学の吟味に入る前段階の議論

として、この時期のホワイトヘッドの論理観や美学についての見解の確認を行った。1930年代の著作『観念の冒険』やその他の諸論文においてホワイトヘッドは、プラトンの『ソフィスト』を参照しつつ論理学とはいかなる学であるかを論じている。さらに、こうした議論には、『ソフィスト』を、緒論でも扱ったシェーファーの「両立不可能性」概念やラッセルとの共著『プリンキピア・マテマティカ』と関連づけるような記述が含まれている。本章では、こうした記述を整理することで、ホワイトヘッドが、論理学をパターンの探求と両立不可能性の精査の学として理解していたこと、そして、この定義にもとづいたプラトン、ラッセルとホワイトヘッド、シェーファーを繋ぐ彼特有の論理学史観を彼が持っていたことを明らかにした。次に本章では、「意味の分析」の記述から、ホワイトヘッドが美学もまたパターンや排除の問題を含むがゆえに論理学と共通するものがあるとみていたこと、そして遠い未来においては論理学が美学の基礎になるだろうというヴィジョンを彼が持っていたことを確認し、彼の論理学史観と美学観とが交差する点を明らかにした。

第二部第二章 予備的考察：思弁哲学と「有機体の哲学」

第二章では、次章以降の議論の準備作業として「有機体の哲学」の基本概念や原理についての確認を行った。まず、『過程と実在』での説明をもとに、ホワイトヘッドの方法論である思弁哲学が「十全性」と「整合性」という二つの理想を目指すものであることを確認した。次いで、この方法論でもって構築された形而上学体系である「有機体の哲学」の基本的概念や図式、諸原理についての説明を行った。これにより第一部で確認した過渡期の諸概念や着想が1929年以降どのような形で体系に組み込まれるに至ったかを示した。

第二部第三章 「有機体の哲学」における二種類の両立不可能性(incompatibility)

第三章では、「両立不可能性」の概念がホワイトヘッドの「有機体の哲学」において果たしている機能や位置づけについて考察した。第二部第一章でも見たとおり、「両立不可能性」は、1929年以降のホワイトヘッドの論理観を支える概念である。本章ではまず、『観念の冒険』や『過程と実在』においてホワイトヘッドがこの概念を形而上学的な議論に組み込んでいることを指摘し、次いで彼が著作においてこの概念を論理学と関連させて用いる場合もあれば美学的な議論において論理的両立不可能性ではない両立不可能性として使用する場合もあり、この両立不可能性の用法に奇妙な二義性があることを指摘した。そこで第三章ではこの二つを「論理的両立不可能性」と「美的両立不可能性」と便宜的に呼び分け、この二つの両立不可能性が形而上学的な議論においてどのように使い分けられているかを考察した。その結果、論理的両立不可能性と美的両立不可能性はいずれも、現実的存在の生成に対して課せられる二つの異なった制約（範疇的制約）と関連しており、この制約にもとづき排除ないし回避されるべきものとして位置付けられていることが明らかになった。さらに、この範疇的制約がホワイトヘッドの考える「予定調和」の論理的形成条件と美的形成条件であ

るとされていたことから、彼の「信念」はこの予定調和の説に結実しているのではないか、という暫定的な結論を得た。

また、第三章の考察からのもう一つの帰結として、1924-25年の時点で見られた論理学の基礎を形而上学が扱う実在の構造に求めようとするホワイトヘッドの着想が、1929年以降においては、論理学的概念としての両立不可能性の根拠を、範疇的制約という実在の持つ制約に求めようとする議論に引き継がれていることが明らかになった。

第二部第四章 「パターン」をめぐる考察、論理学・形而上学・美学の関係についての再検討

第四章では、形而上学的な概念としての「パターン」についての考察と、論理学・美学・形而上学の関係についての整理および再検討を行った。まず『過程と実在』の読解のもとに、パターンの概念について、「コントラスト」の概念との関係から説明を行った。コントラストとは、具体的な現実的存在の生成において、その現実的存在を構成する諸要素が互いの個性を際立たせあい共存している状態を指している。それに対しパターンとは、このコントラストの実現に含まれるコントラストの「様式 *manner*」である。この形而上学的なパターン概念の確認の後、第一部第一章で扱った論理学的なパターンとは、現実的存在のコントラストに内包されるパターンを特定の現実的存在やコントラストから抽象し切り離したものであると解釈することで、ホワイトヘッドの形而上学と論理学との関係を整理した。次に、本章ではもう一つの学である美学についても検討を加えた。美学は、その学の対象がパターンを含む点において論理学と接近するものであるが、しかし同時に美学の扱う対象はパターンに還元されない具体的なものである限りで美学は論理学から区別されていることを明らかにした。この学問としての美学について、ホワイトヘッドは最後まで明確な定義を与えるに至らなかったが、他方で、具体的な存在における美の実現に関してホワイトヘッドは、彼の形而上学にもとづく芸術論において一定の説明を与えていることを指摘し、次の章への接続とした。

第二部第五章 ホメロスを聴くオデュッセウス—ホワイトヘッドの芸術論と美の創造

第五章では、ホワイトヘッドの芸術論について考察した。『観念の冒険』においてホワイトヘッドは、彼の有機体の哲学にもとづいた独自の芸術論を展開している。本章では、この芸術論の終わりで提示されている〈ホメロスの『オデュッセウス』が詠われるのを冥府のオデュッセウス自身が聴く〉という一見奇妙なイメージに着目し、このイメージはホワイトヘッドの芸術論の特徴を象徴的に表現したものであるという仮説のもと、彼の芸術論の解明とイメージの解説を試みた。その結果、ホワイトヘッドの想定する芸術とは〈真理〉と〈美〉という二つの理想の達成を目指す動的な運動として理解できること、そしてこの芸術の定義のもとでは、人間とそれ以外の存在、創作と鑑賞との間には本質的な区別がないことを明らかにした。そして、上記の〈ホメロスを聴くオデュッセウス〉のイメー

ジは、本質的には人間に限定されていないが、人間経験において顕著にあらわれているような、芸術による〈真的美〉の実現という事態を象徴的に表現したものであることを明らかにした。

4. 成果のまとめ（結果・考察）

本論文は、ホワイトヘッドの形而上学の発展が〈事物の体系には論理的調和と美的調和が含まれており、宇宙の進展はこの二つの調和によって条件づけられている〉という信念の理論的展開として解釈可能であるという仮説を立て、この仮説の実証に取り組んできた。本論文の議論を通して、宇宙の進展を条件づける二つの調和についての信念は1929年においては、論理的形成条件と美的形成条件をもつ「予定調和」の説へと展開されていることが明らかとなった。ホワイトヘッドは、すべての現実的存在が一樣の条件に従いつつ、なおかつ差異をもった多様な存在として生成することを可能にするものとして、この二つの形成条件を持つ予定調和説を構築している。このことを本論文の議論から明らかにし、仮説の正しさを示した。

また、ホワイトヘッドによるこのような予定調和説を含む形而上学の構築は、学問としての論理学と美学を「パターン」や「両立不可能性」の観点から捉えなおそうとする議論と並行し進められ、相互参照的になされたことを本論文では示した。

7812 字

5. 主な参考文献

- Russell, Bertrand and Whitehead, Alfred. North, *Principia Mathematica*, vol. 1, 2nd ed., Cambridge: Cambridge University Press, 1925 (1st ed., 1910).
- Sheffer, Henry. M., “A set of five independent postulates for Boolean algebras, with application to logical constants”, in *Transactions of American Mathematical Society*, vol.14, 1913, pp. 481-488.
- Whitehead, Alfred North, *Science and the Modern World*, New York: Free Press, 1967(1925).
- , *Process and Reality : An Essay in Cosmology*, Corrected Edition , New York: The Free Press, 1978(1928).
- , *Adventure of Ideas*, New York: The Macmillan Company, 1961(1933).
- , *The Modes of Thought*, New York: The Free Press, 1968(1938).
- , *Essays in Science and Philosophy*, London: Rider, 1948.
- , *The Harvard Lectures of Alfred North Whitehead, 1924-1925; Philosophical Presupposition of Science*, ed. P. A. Bogaard and J. Bell, Edinburgh: Edinburgh University Press, 2017.